

◁年会・合同シンポ報告▷

第13回日本放射光学会年会・
放射光科学合同シンポジウム

実行委員長 黒澤 宏 (分子研)

2000年の記念すべきときに、第13回日本放射光学会および各放射光施設と利用者懇談会が主催の合同シンポジウムが、1月7日(金)から9日(日)までの3日間、岡崎国立共同研究機構内に新設された岡崎コンファレンスセンターで開催された。4施設の持ちまわりで開催されることになっており、岡崎での開催は今回で2回目である。4年前は、研究所内に場所がなく、仕方なく市内の竜美ヶ丘センターを利用した。研究所から距離もあり、しかもOHPやポスターボードなども研究所から運搬しなければならず、準備に大変な労力を要したようだ。それを思えば、今回の会場は研究所から歩いて2分の近さで、しかも種々の設備が完備されており、ちょっと手狭な点を除けば、すばらしい場所である。

昨年7月に開催された、大熊春夫氏(学会行事委員長, SPring-8)を委員長とする組織委員会において、第13回合同シンポジウムの組織および実行の概要に付いて議論され、実行委員長として黒澤、副委員長に繁政英治氏(分子研)が指名された。事前に話があったものの、組織委員会で決まると、「いよいよ」の感があった。とはいうものの、半年も先のことなので、「まだまだ」の気持ちも心のどこかに潜んでいたように思う。

会場は、上にも書いたように岡崎コンファレンスセンターという名のすばらしい施設が新設されているので、そこを使うことにした。講演会場として使用できるのは、大・中・小の3つの会議室と、ロビーである。企業の展示会場とポスター会場を含めると、どの部屋をどのように使うかは、難しい問題であり、展示企業の数とポスターの数によっても変更せざるを得ないと思われ、会場の詳しい使用に付いては、実行委員会でもう少し検討してからということになった。しかしながら、3つのオーラルセッションをパラレルで実行できるようにすることは確保するという約束で。懇親会に付いては、普段は機構内の食堂として利用している職員会館のレストランを使うことにした。200名くらいの参加者であれば十分に収容可能であり、何よりも学会会場から歩いて5分と掛からない点が魅力である。さらに、会期が土曜日と日曜日を含んでおり、機構内食堂が休みで、適当な食事場所が名鉄東岡崎駅付近まで行かなければならないことも検討課題であった。昼の休憩時間を

1時間程度とすると、時間的に厳しいことが懸念され、弁当の販売なども提案されたが、最終的には、職員食堂を開店していただくことで、昼食の点は意外とあっさり解決を見た。400人の参加を予想すると、施設の容量によっては昼食も大きな問題となることが明らかとなった。また、学会にとって重要なことは、企業展示(特別展示)にできるだけ多くの企業に参加していただくことにあり、そのための会場準備に対する心配りも必要であった。どのような場所で、どのようなアイデアで、企業にも魅力があり、シンポジウム参加者にも魅力があるようにできるか、大変な課題である。

ところで、実行委員長の役目としては、合同シンポジウムに日ごろの成果を発表する研究者・学生ならびに展示にご協力くださった企業の方々に、気持ちよく参加していただく環境を作ることと心得、実行委員会の組織づくりから着手した。年会・合同シンポが4施設の持ち回りで開催されて来た経緯から4年前にも世話役をされた方も多く、今回についてはできるだけ新しい方々をお願いすることにした。ただ、企業展示に付いては、ブースの配置や電源確保などの管理者との交渉が必要なことから、前回同様、酒井楠雄分子研技術課長の手腕にゆだねることに付いて、同氏が快く引き受けてくださり、実行委員長としては幸先のよいスタートを切れたと思っている。次に重要な会計と懇親会は、私と同様の流動部門教官として2年契約で分子研に滞在している福井一俊氏と長岡伸一氏をお願いすることにした。両氏は、流動とはいうものの以前に分子研の職員であったので、内部の事情に詳しく、全部をお任せできることが一番重要な点であった。次に、オーラルとポスターの会場の設営、準備などについて、委員長の独断であるかもしれないとの危惧を感じながらも、ポストドクとして日夜研究に励んでいる若い人をお願いすることに決めた。一つには、放射光学会実行委員としての経験をつむことと、もう一つは研究面だけでなく、責任をもって仕事を任せられることができる人材であることを放射光関係者にアピールして、これからパーマネントの職を得る際にプラスになればとの考えであった。結果としては、この人選は的中し、彼らが積極的に会場レイアウトから実際の模様替え、器具などの整備も含めて、完璧なまでに成し遂げてくれた。想像

以上の働きといえば彼らに失礼とは思いますが、本音である。それくらい、彼らの働きは目覚しかった。実行委員会のメンバー以外に、秘書の皆さんには、本当にお世話になった。当日の受付やお茶の用意だけでなく、それに至るまでの買だしから弁当の手配と、よくやっていただいたと感謝の気持ちで一杯である。

7月から組織委員を中心に今までに参加して下さった企業、東海地区での開催と言うことで地域の企業に案内状をお送りし、さらには電話などをお願いした結果、出版社を含む46社が参加くださった。企業展示会場をポスター会場と同じ部屋に設定し、さらにはポスター発表の間に特別展示会場でコーヒーとスナックのサービスをする事を計画した。インスタントではない“おいしい”コーヒーとちょっとしたお菓みに人気が集まり、たくさんの方が展示ブースを訪れてくれた。このサービスも後押ししたものと自負している。いずれにしても、シンポジウムが大盛會に終わったのも、ひとえに参加くださった企業の方々のご協力によるものと感謝する次第である。

また、常設展示の施設報告も例年通りの14件があり、受付周辺の入り口付近に設営したボードに各施設のポスター並びに資料が並べられ、各施設の状況や計画などを知る良い機会を持つことができた。放射光関連ニュースとしては、佐賀県に放射光施設の建設も決まった状況にあり、今後このような常設展示がますますにぎわいを見せることになるかと期待される。

年会・合同シンポの中身の責任者としてのプログラム委員長には UVSOR 利用者懇談会会長の難波孝夫氏（神戸大）が組織委員会において指名された。プログラム委員会での議論としては、オーラル発表件数を増やすことと年会と各所利用者懇談会を含めて3日間とし、さらに一般講演を3日間で行うことであった。その他は例年通りで、「特別講演」及び「企画」が検討され、特別講演2件、企画が4件となった。企画に関する提案数が少なく、議論をする余地が少なかった印象であるが、最終的には非常にホットな話題の「企画」が企画されたように思う。

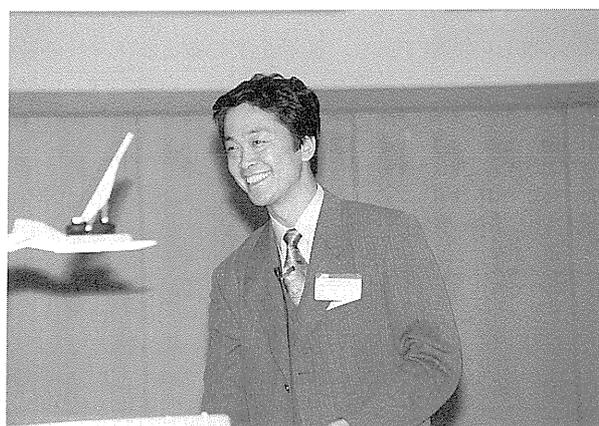
ところで、実際の年会・合同シンポは、1月7日（金）朝の UVSOR 利用者懇談会からスタートした。前夜の雨も上がり、天候は味方をしてくれているように感じた。一方で、初日午前の UVSOR 利用者懇談会には参加者が集まらないのではないかと危惧もささやかれたが、ふたを開けてみると、まあまあ参加者が会場に集まり、順調に滑りだした。利用者懇談会は、午後の SPring8 そして PF と続き、ますます盛況になってきた。4時から、企画講演そして一般講演が始まった。これは、初日からできるだけたくさんの方々にきていただこうと、プログラム委員会での決断で決まったものである。その結果、初日の登録者数は210名を超え、会場では熱い議論で熱気にあふれかえていた。その間、ちょっとした出来事が受け付け周辺で起きていたことをご存じの方はあまり多くはないと思う

が、楽しい反面、恒例にならなければ良いが、とも思う。

2日目（8日）に行われた「特別講演」は、分子研所長でありクラスターに関する研究で有名な茅幸二氏による「分子から分子集合体まで」と題する講演があった。茅氏は、東北大から慶應義塾大へと移る中で、もっぱらクラスターの研究に従事されてきた歴史とともに、水銀と希ガスから成るファンデルワース分子の電子状態、水素結合二量体のプロトン移動反応、ナノ半導体粒子の発光、有機金属クラスターに関する話題について講演した。中でも、有機芳香族化合物と遷移金属原子との間にできる多層サンドイッチ構造のクラスターに関する話題はとてもおもしろく、会場内にホットな話題を提供してくれた。続いて中井泉氏（東京理科大）による「放射光蛍光 X 線分析—ヒ素中毒から考古学へ—」の講演があった。中井氏は、和歌山中毒事件におけるヒ素の分析鑑定で有名であり、分析という科学とは別世界の生々しい鑑定という作業に関する話題も非常に興味深いものであった。さらに、放射光蛍光 X 線分析を利用して希土類元素やウランの分析に適用しておられ、その成果が文化財の非破壊分析に応用できることを明らか



特別講演 茅 幸二氏（分子研）

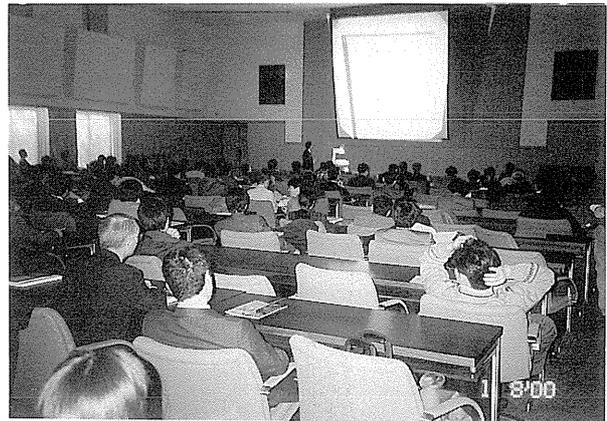


特別講演 中井 泉氏（東理大）

にし、さらに進めて物質の持つ履歴情報(物質史)を解明する新手法として位置づけるべく研究開発を行っておられることを報告された。岡崎コンファレンスセンターの大会議室を埋め尽くすほどの聴衆にとって、大変魅力ある話が聞けたものと思われる。

企画としては、初日に①X線散乱で軌道秩序は見えるのか? をテーマとして、4件の講演と全体討論があった。同時に開催された企画②異常散乱を利用した蛋白質のX線結晶構造解析では、3件の講演があった。さらに、最終日に、③放射光とポンプ・プローブ分光で3件、そして④放射光X線溶液散乱法による蛋白質のフォールディングの研究について4件の講演があった。蛋白質ないしは生化学における話題が多いのが特徴であるが、いずれも放射光ならではの研究であり、ホットな話題とともに今後の発展に期待が大きな講演であった。ポンププローブ分光は、現在手に入る2大光源である放射光とレーザーを組み合わせることによって、新しい情報が得られる手法に関する話題であり、固体物理関連の研究者にとっては魅力ある手法であることは間違いない。このような企画講演を通じて、多くの人に新手法の提供をしていただくことは非常に意義の深いことと思われる。生物関連の会場が少し寂しい気がしたが、企画全体を通じてはおおむね盛況であった。

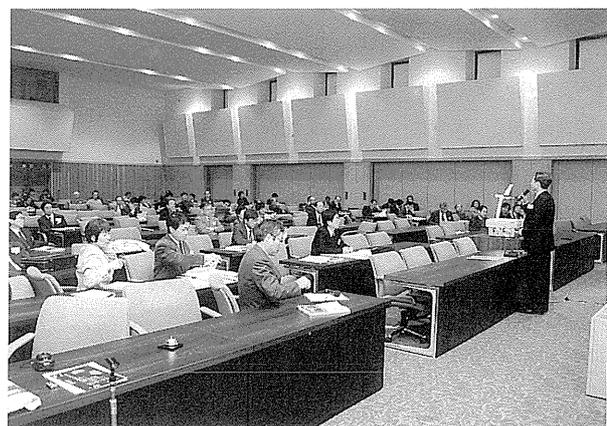
一般発表は例年通り発表者の選択に応じてオーラルとポスターに分かれて行った。オーラルは3日間にわたり2ないしは3会場を使って5分野に分かれての開催である。分野ごとの発表件数は、VUV-SXが18(18)件、加速器・装置が6(6)件、X線回折・散乱が17(12)件、XAFSが10(6)件、生物関連が8(6)件で、総数にして59(48)件の発表となった。かっこ内は前回における発表件数であり、11件も増加した。プログラム委員会において、今回は特に若い人たちにオーラル発表の機会を増やしたいとの意向があり、その成果が数に現れたものと思われる。ポスターセッションは2日間にわたって行われ、VUV-SXが55(57)件、加速器・装置が54(37)件、X線回折・散乱が37(37)件、XAFSが11(27)件、生物関連が19(22)件、ポストデッドラインが28(13)件の総数204(191)件があった。最後のポストデッドラインが増えたことは、事務局に手間暇をかけたことは否めないが、各施設でホットな実験が進行中であり、直前に新しい成果が出た結果であろうと思われる。オーラルとポスターの両方で発表された総数は263(239)件となった。オーラル会場には、岡崎コンファレンスセンターの2階の小会議室をそのままの形で使用したときと、2分割して使用した場合があった。2分割すると、一会場での収容人数が70名程度となり、立ったままで講演に聴き入った姿や会場には入れずにあきらめてお帰りになる姿があった。岡崎コンファレンスセンターの面積に制限があるために仕方がないというものの、実行委員としては、まことに申



オーラル会場風景



ポスター会場風景



総会風景

し訳ない思いで一杯であった。また、特別展示会場の一部とその前のロビーを使ってポスター会場も、最終日の110件の発表にはちょっと狭かった感がある。休憩場所と喫煙場所などのプログラムには載らない場所の必要性もあって、全体に窮屈な思いをされた方も多かったに違いない。

総会は2日目の午後に大会議室で行われ、佐藤繁会長



懇親会風景

(東北大)の挨拶に続いて、各監事からの報告並びに提案があり、執行部の提案通りの活動方針が承認された。特別講演に引き続いて同じ場所での総会開催でもあり、出席率もかなり良かったのではないだろうか。ところで、放射光学会とは関係ない話だが、との前置きで、佐々木泰三先生からある申し出があった。それは SESAME 計画として知られている、ドイツの BESSY-I を性能アップした上で、中東に移設する件である。宗教も国も越えた純粋に科学の話として共鳴できる話題であり、さらには放射光科学の発展につながることであり、その計画に賛同する方々からわずかばかりの寄付を募ることであった。一口千円の募金で、最終的には100人近い人の賛同があったと聞いている。

総会に続いて、場所を機構内の職員会館レストラン「サングリア」に移し、懇親会が行われた。シンポジウムにおいて、たくさんの人々と気楽に話し合える場として重要な位置を占め、さらには最も楽しいひとときを過ごすことができるのは、この懇親会であろう。私は、実行委員長として歓迎の言葉と実行委員へのねぎらいの言葉とともに、若手の実行委員4名(銘川・竹添・岩崎・小野)を紹介し、非常勤の研究者であるので、今後ともよろしく願いたい気持ちを伝えた。彼らが全オーラル・ポスター会場の設営から運営までを完全なまでに執り行い、今回のシンポが盛会のうちに無事終了できたのは彼らの力無くしてはなし

えなかったことは、ここでも強調しておきたい。懇親会は、茅幸二分子研所長のいつものながらのユーモアあふれる挨拶、そして佐々木泰三先生の乾杯へと続いていった。また、佐藤繁学会会長から、若手奨励賞の紹介ならびに授賞式もあった。35才未満の研究者の優れた業績を表彰することにより、若手研究者の研究活動を激励し支援するこのような制度も今回で第4回となる。その一人目は、東大工学系研究科の Han Woong Yeon 氏が表面科学の分野での受賞で、対象となった研究は「シリコン表面上の金属原子鎖の不安定性と電荷密度波」であり、もう一人は原子分子物理学の分野での受賞で、対象は「ヘリウムの二重共鳴電離における直線偏光・円偏光二色性」の研究で新潟大自然科学研究科の副島浩一氏が選ばれた。どちらも放射光を使った世界に伍する成果を得ており、これに刺激されて日本の科学技術レベルの向上に貢献してほしいものである。懇親会場では、いつものメニューに加えて、ローストビーフ・おそば・ピラフなどが所狭しと並び、いくつもの話の輪の中での楽しい会話と、時は順調に過ぎて行った。懇親会もたけなわの時であったが、次回開催地の広島から、谷口雅樹氏(広島大)の案内があり、シンポは次の日も続いたが、このときばかりは心は早広島に移っていたのは私だけではないだろう。最後は、大熊春夫組織委員長の一本締めでお開きとなり、それぞれの宿舎(?)への帰途についた。

今回初の試みとしてインターネットに接続されたコンピューターを公開した。事前のチェックが十分でなかったこともあって、5台の内の2台がうまく接続できなかったようだ。でも、多くの若い人々がここに足を運んでいる姿を見ると、今後会議では、インターネット接続の準備が必需品であるように思えた。

本報告が、実行委員長の感想になってしまったきらいがあるが、年会・シンポの本当の姿をお伝えできたのではと自負している。招待講演者を含む参加者の総数は422(426)名であった。うち、学生の参加者が92名であり、彼らの世代には、発表件数、参加者ともども、これより遙かに増えていることを期待して、本学会の発展を祈りたい。

最後に、合同シンポの始めから終わりまで大変お世話になった学会事務局の方々にお礼申し上げたい。